ドイツにおける近年の語用論研究

草本　晶

0.　はじめに

ドイツにおける言語学研究は、マンハイムにあるドイツ語研究所　(Institut　für Deutsche Sprache, Mannheim: 以下IDS)を中心に行われている。ドイツ国内のドイツ語研究機関としては、ほかにも書誌学研究所 (Bibliographisches Institut)、ゲーテ・インスティトゥート(Goethe-Institut)、ヘルダー研究所　(Herder-Institut)、ドイツ語協会　(Die Gesellschaft für deutsche Sprache)、言語・文学アカデミー(Deutsche Akademie für Sprache und　Dichtung)などがあるが、これらはむしろ辞書や参考図書の編纂、ドイツ語教育研究、ドイツ語研究の助成やドイツ語に関する相談などを業務としており、現代ドイツ語の学問的研究という点でIDSほど包括的に研究を進めている機関はない。そこで、本稿ではIDSにおける近年の語用論関連の研究プロジェクトを中心に紹介する[1]。

1.　IDS語用論部門

IDSの研究部門は、文法、語彙、語用論の３部門から成っており、文法部門では現代ドイツ文法の記述および他言語との比較が、語彙部門ではドイツ語の語彙の意味および運用条件、語源、とりわけ現代における語彙の変遷が研究されている。語用論部門が掲げる主な課題は、話し言葉における言語使用の形式・過程・環境および社会的条件を研究することである。

2.　IDS語用論部門の研究プロジェクト

ここでは、IDS語用論部門で行われている研究プロジェクトのうち、最近の重要なものを５つと、ドイツ学術振興会を中心とした共同プロジェクトを紹介する。さらに、IDSがとくに力を注いでいるコーパス技術研究についても概説する。原則として年代順に取り上げるが、研究期間が重なるものもあり、以下に挙げる順序は厳密に時系列に従うものではない。

2.1.　都市地域言語研究プロジェクト

このプロジェクトは、「都市の言語、マンハイム」(Stadtsprache　Mannheim)の名称のもと、ドイツ南西部の都市マンハイムにおいて1981年から10年間、いわゆる「庶民」の日常的言語行動を詳細に観察・記録した社会言語学的研究である。

その成果はすでにDebus, Kallmeyer, Stickelらの編纂のもと、Schriften des Instituts für deutsche Sprache シリーズの第４巻として、４分冊の形で1995年に刊行されている。第１分冊ではマンハイム市民の日常会話の実例分析ならびに社会言語学的研究の方法論が展開され、第２分冊では社会言語学的研究の基盤となる社会的文脈を把握するねらいから、マンハイム市民の生活が民族誌的に記述され、第３分冊は、ある年配女性グループの社会生活の実相とそのコミュニケーション上の文体が提示され、第４分冊では、芸術文化的関心が高い女性グループの言語と政治的関心が高い女性グループの言語との比較が報告されている[2]。

2.2. 話し言葉研究プロジェクト

前項のプロジェクト同様、この「話し言葉の特徴」(Eigenschaften gesprochener Sprache)も、すでに完了している。その目的は話し言葉に特有な文法的特徴を把握することで、具体的には、文書および機械を媒体としたコミュニケーションと口頭によるコミュニケーションとを比較し、コーパスに基づく作用素一作用域(Operator-Skopus)構文[3]の分析を試みた。その際、書き言葉分析のための従来の分析・記述カテゴリーは話し言葉分析には不十分であるとして、カテゴリーの検証・新解釈・拡張も行われた。このプロジェクトの成果はStudien zur deutschen Sprache. Forschungen des Instituts für Deutsche Sprache. (Tübingen: Narr) シリーズから近々刊行されるとのことである。

2.3. 言語統合に関する研究プロジェクト

言語統合研究の対象として選ばれたのは、いわゆる「帰還移住者」(Aussiedler)である。彼らは、第二次世界大戦後、ポーランドや旧ソ連などかつてドイツ領だった東欧諸国からドイツへ帰還移住してきたドイツ系移民とその子孫である。この種の移民は近年大量に流入しており、特にドイツ語能力が原因の就労・就学難が社会問題となっている。この「帰還移住者の言語統合」(sprachliche Integration von Aussiedlern) プロジェクトでは、これら移民のドイツ国内におけるコミュニケーション共同体への統合過程を追っているが、とりわけドイツ語習得における世代による相違、移民家族内の会話の変化過程、移民と地元住民とのコミュニケーションの観察、それらをふまえた上での移民のための語学講座への提言などが興味を引く。このプロジェクトも前述の２つのプロジェクト同様すでに完了している[4]。

2.4. レトリック研究プロジェクト

このプロジェクトは「会話レトリック」(Gesprächsrhetorik)の名称のもと、とりわけ問題解決および摩擦緩和に関わる会話進行上のレトリックの観察・描写を試みている。

この研究は、先行するいくつかのプロジェクト、例えば相談・調停会話の分析、問題解決のコミュニケーション方法の分析等の成果をふまえ、その体系化・拡張を目指したもので、現在その成果をまとめている段階という[5]。

2.5. 文体研究プロジェクト

1999年、IDSは「コミュニケーション的社会的文体論」(kommunikative soziale Stilistik)をテーマに包括的な研究に着手した[6]。その目的は、一般的な文体形成の原則を規定し、さらに、言語が社会的にどのように発展するか、そのモデルを提示することである。

研究の枠組として、IDSは以下の5つの社会的レベルを挙げている。1．上下の区分（社会の階級的構造における権力・資本・教養等の配分の差と言語の差異）、2．職業と余暇（職業生活や余暇生活の分化、仕事と余暇の区別、現代社会における自己理解のための職業概念の役割）、3．定住者と移民（異文化・異言語の接触によって生じる対立とそれに対する社会の対応）、4．青年と老壮年（若者文化と老壮年世代文化の相違、世代による価値観の差異）、5．公と私（その境界の揺れ、公的生活の求心的傾向と個人の生活小世界への分散とのバランス）。

この研究では、社会的アイデンティティを象徴するものとして、コミュニケーション上の文体を重要視している。コミュニケーション参加者は言語を通じて自他を定義・認識する際に語用論的規則や丁寧さ・摩擦の緩和・自他を社会的に特徴づける表現法といった要因を考慮するものであり、これらの要因を多様な言語レベルと結合させることがコミュニケーション的社会的文体の本質をなしているためという。

またこの研究では、コミュニケーション的社会的文体と特に密接に関わる要因として以下の3つを挙げている。第一に、コミュニケーション参加者は自分のコミュニケーション行動を社会との関連で構成するという点。第二に、コミュニケーション参加者は、特定の社会集団に固有の表現や特徴的な言語形式を認識・評価することで、自己の経験を社会意味論的に変換するという点。最後に、コミュニケーション上の規範と実際の社会行動との対比（コミュニケーション参加者は、「礼儀にかなった行動」や「教養志向」といった規範的な概念と、それらとは対立する「原始的根源的なもの」や特定のサブカルチャーにおける粗野で醜悪なもののあからさまな強調といった概念との矛盾の中で自己の社会的アイデンティティを形成していく）という点。このような観点から、特定のコミュニケーション的社会的文体を通じて、自己の社会的アイデンティティを形成することが容易になるという。

2.6. 言語変異研究プロジェクト

IDSの主催ではないが、2.5.で触れた「コミュニケーション的社会的文体論」プロ

ジェクトに関連して、ドイツ学術振興会(Deutsche Forschungsgemeinschaft: DFG)がIDS・マンハイム大学・テュービンゲン大学の共同研究グループを編成し、「コミュニケーションの実際としての言語変異」(Sprachvariation als kommunikative Praxis) というプロジェクトを2000年３月から推進している。

この研究の目的は、言語変異のモデルが成立・安定・拡張する際の条件と傾向を解明することである。研究対象はあらゆるレベルでの変異現象で、単一言語および多言語の多様な言語的社会的組み合わせ（母語と非母語、標準語と非標準的変種、言語混交も含む）の比較調査を行い、言語変異の実例をミクロ分析した後、言語的社会的実状と関連づけていく方針という。

3. IDS語用論部門におけるコーパス技術研究

この項では、コンピュータ処理を可能にする言語資料の作成・管理、プログラムシステムの構築などの技術に関連するIDSの業務を概観する。

IDS内の話し言葉の記録管理および資料整備の中心となっているのは、ドイツ語記録保管所 (Deutsche Spracharchiv) である。そこでは、話し言葉資料の保存・デジタル化・記録を行い、それらの資料を部内・部外を問わず利用可能な形に整備している。コーパス技術に関連して現在進行しているプロジェクトには以下のものがある。

a) 談話データベースシステム(Diskursdatenbank-System: DIDA)のさらなる開発

このプロジェクトは、録音ないし録画された言語資料を文字記号に転写し、話し言葉コーパスの構築や談話資料の管理を容易にすることを目的としている。文字転写は総譜形式で行われ、各話者の行に所見や注釈、話者の行動といった任意の情報をいくらでも付加することが可能という。

b) COSMAS II の整備

COSMASはCorpus Storage, Maintenance and Access Systemの略で、IDSが所有する膨大なコーパスの開発・管理・補修・拡大のために用いている独自のオンラインシステムである。このシステムは1997年よりインターネット上で公開されており、誰でも無料でコーパス検索用に利用できる（ただし著作権上の理由からコーパスの公開は全体の60％程度）。2000年３月からは COSMAS I に代わり、機能をさらに拡大したCOSMAS II が運用されている。

c) 「アラインメント」(“Alignment”)

文字転写データと音声データを機械によって自動的に同調（シンクロナイズ）させることを目指すプロジェクト。その目的は、現在利用されている談話資料検索と同様の環境を、音声データ検索（再生も含む）の分野でも可能にすることだという。

d) 話し言葉の文書記録(schriftliche Erfassung gesprochener Sprache: SERGES)

音声データのデジタル化を担当。上述のa)のDIDAやc)のアラインメントの基盤づく

りに相当する。

e) データベース「ドイツ語話し言葉」(gesprochenes Deutsch)の編成

ドイツ語記録保管所で保管されている録音資料の文字転写文書のデータ化、保管資料のコンピュータ検索を可能にするための資料整備等が行われている。

その他、話し言葉を対象としたコーパス技術に関してはIDSのホームページ内にリンク集があり、コンピュータを用いた話し言葉解析についての情報を提供している[7]。

さらに、語用論部門で開発されている興味深いプログラムとして、会話分析情報システム(Gesprächsanalytisches Informationssystem: GAIS)がある。このシステムは、多様で複合的な会話分析研究の知識を体系化しており、当初から大学での授業との関連において開発されているため、基本的な理論や方法の手引きとなっている。

4. ドイツにおける語用論について

語用論はドイツでは、まず記号論ならびに論理学と関連して、それまでの伝統的な言語学では対象とされなかったような、多様な新規の学問的認識を包含する決定的な概念として受容された。70年代始めにこの語用論に包括的な哲学的理論を与えたのが、Habermasの「普遍的実用論」(Universalpragmatik)である。

語用論が言語構造そのものとより深く関連するようになったのは、70年代のWunderlich、Maasらの研究を経てからである。その際、語用論は、意味の問題、発話行為理論との関連、そしてBühlerに代表される直示的表現分析等において援用された。しかしここで語用論は、根本的に異なる2つの方向をたどった。一方で語用論は、実用論的なものと非実用論的なものを区別するためだけに、いわばそれまでの言語学に付加され「実用言語学(Pragmalinguistik)」として解釈された。他方で語用論は、発話行為、前提条件、様々な含意表現および推論といった言語使用における基本的な諸条件のみならず、言語体系そのものの基本的諸条件をも追究していく。

前者は、80年代、生成文法に由来するモジュール的言語概念に比較的容易に移行したが、そのような方向を、対象範囲の狭さや社会的観点の欠如、生物学的な言語解釈等を理由に批判したのは、後者の立場であった。後者は、直示、接続詞、慣習的言語行動等の実例分析、およびRehbein(1977)らの理論的基礎付けにおいて学問分野としての発展を見ている[8]。

5. テクスト言語学について

60年代半ばから実用的言語使用研究が始められたのに合わせて、書き言葉も文より広範なテクストレベルで研究しようとする動きが興った。多様な問題が様々な観点から提起され、「テクスト言語学」の名の下に研究が行われたが、理論的基盤の不安定さや、分析のための範疇およびモデルの欠如などと相まって、学問分野としては脆弱

な立場にある。その後、構造主義や変形文法の方法ではテクスト構造の分析は困難と判明すると、意味論的テーマ的、機能的および手続き的分析モデルが代わって採用され、テクストの概念および記述レベルの拡大を経て、それぞれのアプローチを統合する方向で研究が進められた。現在、テクスト言語学は、根本的中心的理論を模索するのではなく、さまざまな理論を包括し、テクストをより実用論的観点から把握しようとする方向に進んでいる。具体的には、テクストの結束性の形成、テクストのマクロおよびミクロ構造の形成、テクストの機能などといった、テクストの性質・本質を解明しようとする研究が進められている。

注釈

1 IDSおよびその研究プロジェクトに関しては、インターネットで情報が公開されており、刊行書籍や関連プロジェクトに関しても詳細な情報を得ることができる。本稿は、主としてこのホームページの情報に依拠した。http://www.ids-mannheim.de/参照。IDSに関しては、伊藤　眞（1999）「海外のドイツ語学研究①」『エネルゲイア』(24号) 83-85参照。また、IDSの管轄下ではないが、会話分析研究に関連する情報およびリンクを集めたインターネット・サイトも存在する：Informationen zur Gesprächsforschung: http://www. gespraechsforschung.de/参照。

2 それぞれKallmeyer(1994)、Kallmeyer(1995)、Keim(1995)、Schwitalla(1995) 参照。

3 作用素—作用域構文とは、単語および小さな言語形式が作用素となり、発話全体としての作用域に効果を及ぼす構造を指す。例えば、「正直言ってあの男はあまり好きではない」において、「正直言って」が作用素となり、発話全体をどのように解釈すべきか受け手に手がかりを与えている。この構文に関する研究は、Liedtke/Hundsnurscher(2001)参照。

4 研究成果は３つの異なる個別テーマについてまとめられ、１点はすでに既刊(Berend(1998))、２点が近々刊行される（Meng, K.（2001年8月予定）. *Russlanddeutsche Sprachbiografien*. Untersuchung zur sprachlichen Integration von Aussiedlerfamilien. Tübingen.、 Reitemeier, U.（印刷中）. *Aussiedler treffen auf Einheimische*. Paradoxien der interaktiven Identitätsarbeit und Vorenthaltung der Marginalitätszuschreibung: Äußerungsformate und situative Rahmen in Situationen zwischen Aussiedlern und Binnendeutschen）。

5 この研究に関連して、すでに別の論文集が刊行されている。Kallmeyer (1996)参照。

6 コミュニケーション面・社会集団的側面からみた文体を、便宜上「コミュニケーション的社会的文体」と呼ぶことにする。

7 http://www.ids-mannheim.de/prag/links.html参照。

8 ドイツにおける語用論理論の詳細については、島　憲男 (1998)「ドイツ語意味論・語用論」『海外言語学情報』(9号) 229-240 大修館書店参照。

参考文献　＜語用論関連＞

Berend, N. 1998. *Sprachliche Anpassung*. Eine soziolinguistisch-dialektologischeUntersuchung zum Rußlanddeutschen. Studien zur deutschen Sprache 14. Tübingen: Narr.

Bühler, K. 1934. *Sprachtheorie*. Die Darstellungsfunktion der Sprache. Jena. (1965 2. Aufl. Stuttgart).

Debus, F/Kallmeyer, W/Stickel, G. (Hg.) 1995. *Kommunikation in der Stadt*. Schriften des Instituts für deutsche Sprache. Bd. 4. Berlin/New York: de Gruyter.

Ehlich, K. 1991. „Funktionalpragmatische Kommunikationsanalyse - Ziele und Verfahren." In Flader, D. (Hg.) *Verbale Interaktion*, 127-143. Stuttgart.

Ehlich, K./Rehbein, J. 1972. „Zur Konstitution pragmatischer Einheiten in einer Institution: Das Speiserestaurant." In Wunderlich, D. (Hg.) *Linguistische Pragmatik*, 209-254. Frankfurt am Main: Athenäum

Habermas, J. 1981. *Theorie des kommunikativen Handelns*. 2 Bde. Frankfurt am Main.

Henne, H. 1975. *Sprachpragmatik*. Nachschrift einer Vorlesung. Tübingen.

Kallmeyer, W. (Hg.) 1994. *Exemplarische Analysen des Sprachverhaltens in Mannheim*. Schriften des IDS. Bd.4.1. Berlin/New York: de Gruyter.

Kallmeyer, W. (Hg.) 1995. *Ethnographien von Mannheimer Stadtteilen*. Schriften des IDS. Bd.4.2. Berlin/New York: de Gruyter.

Kallmeyer, W. (Hg.) 1996. *Gesprächsrhetorik*. Rhetorische Verfahren im Gesprächsprozess. Tübingen: Narr.

Keim, I. 1995. *Kommunikative Stilistik einer sozialen Welt "kleiner Leute" in der Mannheimer Innenstadt*. Mit zwei Beiträgen von W. Kallmeyer. Schriften des IDS. Bd.4.3. Berlin/New York: de Gruyter.

Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge. - Neu übersetzt von Wiese, M. 2000. *Pragmatik*. Tübingen: Niemeyer.

Liedtke, F./Hundsnurscher, F. 2001. *Pragmatische Syntax*. Tübingen: Niemeyer.

Maas, U./Wunderlich, D. 1974. *Pragmatik und sprachliches Handeln*. 3. Aufl. Frankfurt am Main: Athenäum.

Meibauer, J. 2001. *Pragmatik*. 2. Aufl. Tübingen: Stauffenburg Verlag.

Redder, A. (Hg.) 1983. *Kommunikation in Institutionen*. Osnabrücker Beiträge zur Sprachtheorie 24. Osnabrück.

Rehbein, J. 1977. *Komplexes Handeln*. Stuttgart.

Rehbein, J. 1979. *Handlungstheorien*. Studium Linguistik 7, 1-25. Kronberg.

Rehbein, J. 1988. „Ausgewählte Aspekte der Pragmatik." In Ammon, U./Dittmar, N./ Mattheier, K.J. (Hg.) *Soziolinguistik*. Ein internationales Handbuch zur Wissenschaft von Sprache und Gesellschaft. Bd. 2, 1181-1195. Berlin.

Rosengren, I. (Hg.) 1987. *Sprache und Pragmatik*. Stockholm.

Rosengren, I. (Hg.) 1993. *Satz und Illokution*. 2 Bde. Tübingen.

Schlieben-Lange, B. 1979. *Linguistische Pragmatik*. 2. Aufl. Stuttgart.

Schwitalla, J. 1995. *Kommunikative Stilistik zweier sozialer Welten in Mannheim-Vogelstang*. Schriften des IDS. Bd.4.4. Berlin/New York: de Gruyter.

Wunderlich, D. (Hg.) 1972 *Linguistische Pragmatik*. Frankfurt am Main: Athenäum.

Wunderlich, D. 1976. *Studien zur Sprechakttheorie.* Frankfurt am Main.

<テクスト言語学関連>

deBeaugrande, R. A./Dressler, W.-U. 1981. *Einführung in die Textlinguistik.* Tübingen: Niemeyer.

Brinker, K. 1988. *Linguistische Textanalyse*. Eine Einführung in die Grundbegriffe und Methoden. 2. Aufl. Berlin.

Coseriu, E. 1981. *Textlinguistik.* Eine Einführung. 2. Aufl. Tübingen.

Daneš, F./Viehweger, D. (Hg.) 1976. *Probleme der Textlinguistik* (Studia grammatica 11). Berlin: Akademie Verlag.

Daneš, F./Viehweger, D. (Hg.) 1977. *Probleme der Textlinguistik II* (Studia grammatica 17). Berlin: Akademie Verlag.

Dressler, W. (Hg.) 1978. *Textlinguistik.* Darmstadt.

Gülich, E./Raible, W. 1977. *Linguistische Textmodelle.* München.

Hartung, W. 1987. „Diskussionstexte: Argumente für eine Sutembetrachtung der Textorganisation." In Rosengren, I. (Hg.) 1986. *Sprache und Pragmatik*. 7-31. Stockholm.

Harweg, R. 1968. *Pronomina und Textkonstitution.* (1979. 2. Aufl.) München.

Heinemann, W. /Viehweger, D. 1991. *Textlinguistik.* Tübingen: Niemeyer.

Isenberg, H. 1968. *Der Begriff »Text« in der Sprachtheorie* (ASG-Berichte 8). Berlin: Akademie Verlag.

Kallmeyer, W. u.a., 1977. *Lektürekolleg zur Textlinguistik.* 2. Aufl. Frankfurt am Main.

Kürschner, W./Vogt, R. 1985. *Grammatik, Semantik, Textlinguistik.* Tübingen: Niemeyer.

Motsch, W. u.a. (Hg.) 1987. *Satz, Text, sprachliche Handlung* (Studia grammatica 25). Berlin: Akademie Verlag.

Petöfi, J. S. 1987. „Von der Satzgrammatik zur semiotischen Textologie." In *Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung* 1, 3-18. Berlin.

Plett, H. F. 1979. *Textwissenschaft und Textanalyse.* Semiotik, Linguistik, Rhetorik. 2. Aufl. Heidelberg.

Scherner, M. 1984. *Sprache als Text*. Tübingen.

Schmidt, S. J. 1976. *Texttheorie.* 2. Aufl. München.

Sowinski, B. 1983. *Textlinguistik.* Eine Einführung. Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz.

Stempel, W.-D. (Hg.) 1971. *Beiträge zur Textlinguistik.* München.

Viehweger, D. 1987. „Illokutionswissen und Illokutionsstrukturen." In Rosengren, I. (Hg.) 1986. *Sprache und Pragmatik*. Lunder Symposium, 47-56. Stockholm.

Weinrich, H. 1976. *Sprache in Texten.* Stuttgart.